

地域協議会の特定家畜伝染病 (HPAI, CSF) 発生予防対策

香川県東部家畜保健衛生所

○ 田中宏一、北所 万貴子、中嶋 亜威

1. はじめに

東部地域家畜防疫推進協議会（以下、協議会 図-1）は、東部家畜保健衛生所（以下、家保）管轄内の3市1町で構成され、家畜伝染病発生予防及びまん延防止対策を協議することを目的としている。

今回、協議会と地区土地改良事務所等と連携し、事業名を東部地域特定家畜伝染病発生予防対策事業とし、養鶏、養豚場周囲にウイルスを近づけない対策を実施したのでその概要を報告する。

2. 材料および方法

HPAI対策としては、管内33養鶏場のうち半径50m以内にため池がある9農場で、対策未実施大規模養鶏場3農場について協議会で対応した。方法は、1番はため池の水抜き、2番目としてトラロープ、防鳥テープ等の設置を協議した。（図-2）

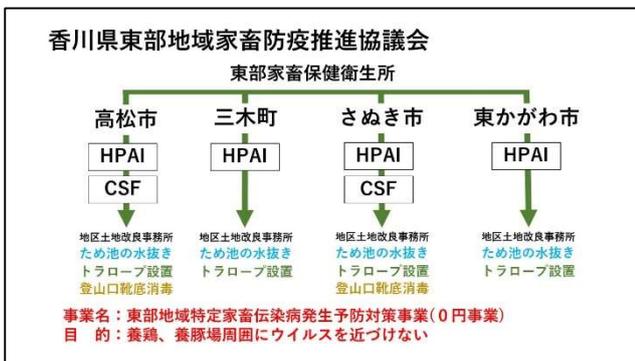


図-1

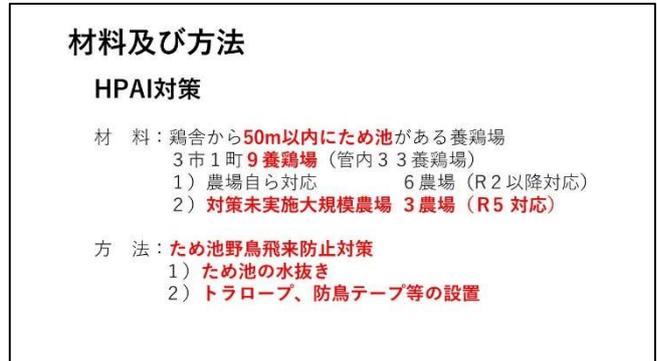


図-2

3. 発生予察について

過去の気象データと各池への野鳥飛来数を基に、HPAI発生パターンを分析し、説明会で活用した。今回、過去の気象データを基にHPAI発生年と非発生年の平均気温の推移を比較した。赤色で示した過去2年のHPAI発生年の平均気温パターンはともに一致し、10月22日を気温上昇ピークとし、前後3日間の温度差が計10度になっていた。このことから10月中旬の気象条件が発生リスクに大きく影響するのではないかと推測した。（図-3）

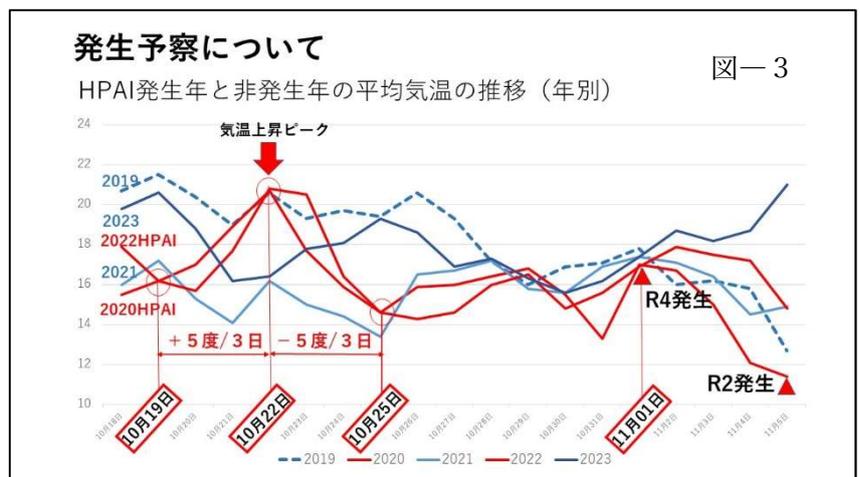


図-3

過去の気象データと各池への野鳥飛来数を基に、HPAI発生パターンを分析し、説明会で活用した。今回、過去の気象データを基にHPAI発生年と非発生年の平均気温の推移を比較した。赤色で示した過去2年のHPAI発生年の平均気温パターンはともに一致し、10月22日を気温上昇ピークとし、前後3日間の温度差が計10度になっていた。このことから10月中旬の気象条件が発生リスクに大きく影響するのではないかと推測した。（図-3）

4. 野鳥ため池飛来防止対策

1) 対策農場 1

12万羽を飼養する大規模採卵鶏ウインドレス鶏舎は、東西2つの大きな池に挟まれおり、昨年度までは野鳥飛来数が増加したごとにアラートを発令し農場への注意喚起を行ってきた。R5年度は2つの池で11月より水抜きをすることとし、結果、現時点（以下、R6年1月現在）で周囲の野鳥飛来はない。（図-4）

2) 対策農場 2

次に、17万羽を飼養する大規模ブロイラー平飼鶏舎では、東西3つの池に挟まれ、昨年度までは野鳥飛来数は少ないものの、発生時の周囲住民等への影響もあり、シーズン中は頻繁な注意喚起を行っていた。R5年度は3つの池でトラロープ等の対策を実施し、現時点で野鳥飛来数は大幅に減少した。（図-5）

3) 対策農場 3

3事例目は、33万羽を飼養する管内最大規模採卵養鶏場では、ウインドレス鶏舎では約30m先に池が存在し、昨年度までは農場内のため池について農場自ら防鳥テープを設置して対応していた。R5年度は、奥の池で12月より水抜きを実施しウインドレス鶏舎近くの池はトラロープと防鳥テープを設置し、結果、現時点で野鳥飛来数は減少している。（図-6）

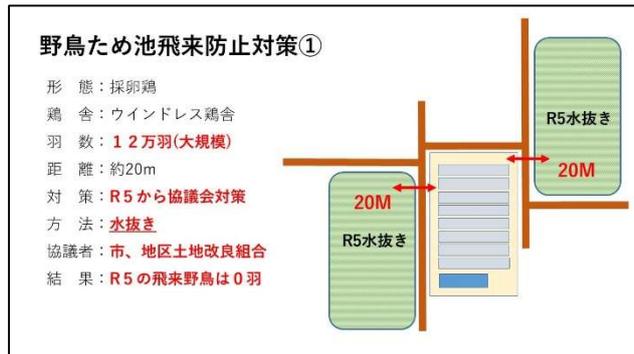


図-4

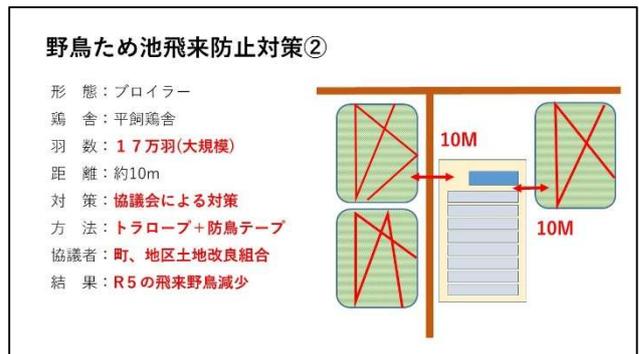


図-5

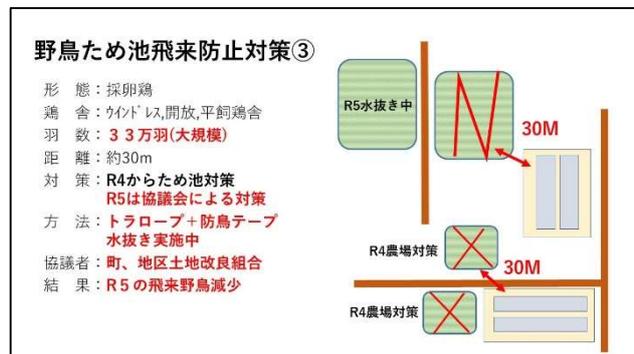


図-6

結果

開始年度	対応者	対応	飼養羽数	効果	備考
① R2～	農場主	ロープ	9万羽	0羽	H30発生農場
② R3～	農場主	ロープ、埋設	4.7万羽	0羽	R2発生農場
③ R4～	農場、水利組合	水抜き	2万羽	0羽	
④ R4～	農場主	ロープ、防鳥壁	2万羽	0羽	
⑤ R4～	農場、水利組合	防鳥糸、消毒	5.8万羽	減少	
⑥ R4～	農場主	水抜き	600羽	0羽	R5異常通報
⑦ R5	協議会	水抜き	12万羽	0羽	大規模
⑧ R5	協議会	ロープ	17万羽	0羽	大規模
⑨ R5	協議会	水抜き、ロープ	33万羽	減少	大規模

図-7

4) 結果

R5年度についてはため池対策未実施の大型養鶏場について、協議会を通じ対策を実施し、管内養鶏場半径50m以内のため池のある9農場全てにおいて、野鳥飛来対策を実施し効果を確認した。（図-7）

5. CSF対策

1) CSF陽性野生イノシシの発生状況

昨年1月4日に白峰山ふもにて、CSF陽性野生イノシシ1例目を確認後、五色台、城山(きやま)堂山にて陽性イノシシを確認した。この事例でイノシシの移動は127日間で26.5kmを要しており、1日に換算するとイノシシは200m移動したことになる。また、陽性イノシシが確認された場所はいずれも里山登山として人気のある登山口近くであったことから、登山者等の人がウイルスを運んでいる可能性を示唆した。(図-8)

2) CSFウイルス拡散防止対策

CSFウイルス拡散防止対策として、登山口靴底消毒を実施することとし、方法を登山者が登山する場合に必ず靴底を消毒するナッジ手法を採用した。野生イノシシのCSF陽性を確認した里山及び拡散を想定した人気の里山、大規模養豚場近辺の登山口を含めて3山7カ所実施し、併せて、さぬき市協議会においては狩猟クラブ、森林組合に靴底消毒薬を配付し、情報周知・注意喚起対策を実施した。(図-9)



図-8

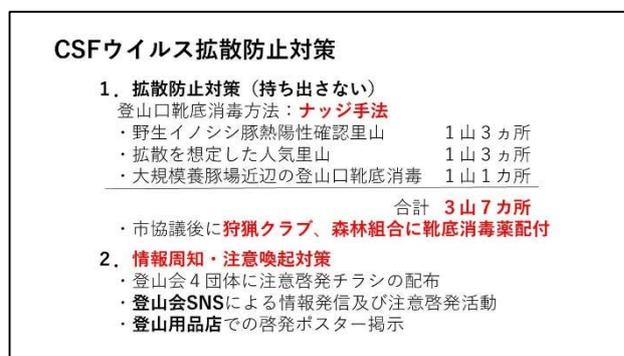


図-9

3) 野生イノシシウイルス拡散防止対策①

陽性イノシシを確認した里山は、平日登山者が約200-300人で、休日となると500人ほどの登山者が訪れる人気の里山で、神社神主及び地元登山会と協議して5月23日に計3カ所の消毒マットを設置した。(図-10)消毒マット(写真-1)や看板を設置し啓発活動を行い(写真-2)、地元登山会が自主的に登山者向けに注意喚起された(写真-3)。また、地元登山会の広報誌で取組を紹介し、約200名会員のグループLINEでも情報共有した。



図-10



写真-1



写真—3



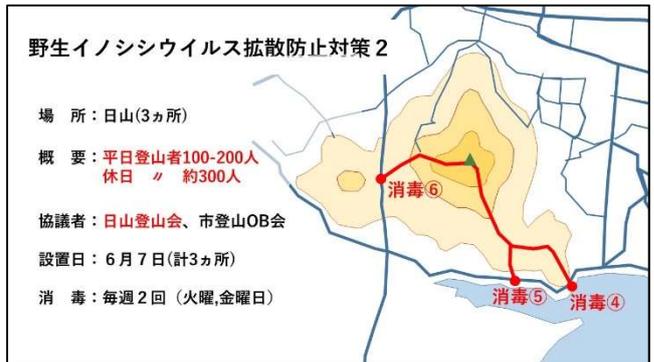
写真—4

4) 野生イノシシウイルス拡散防止対策②

更に、陽性イノシシが確認された場所から直線距離で約7kmの里山(図—1 1, 1 2)についても消毒マット(写真—5)を設置した。その里山も平日は100-200人の登山者が訪れ、休日は約300人訪れる人気の里山で、地元登山会の方と協議し3ヵ所の消毒マットを設置した。



図—1 1



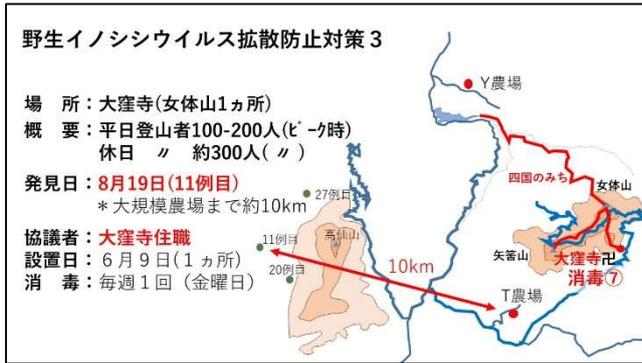
図—1 2



写真—5

5) 野生イノシウイルス拡散防止対策③

続いて、ウイルス侵入防止対策として、大規模養豚場付近の里山がある四国霊場大窪寺についても消毒マット1カ所を設置した。設置後の、8月19日には10km離れた高仙山近くにて11例目が発見されたが、以降（R5年1月現在）、さぬき市内、大窪寺周辺での陽性野生イノシシは発見されていない（図—13）。消毒マットは、ちょうど奥の院に向かう山道の入口に設置した（写真—6）。紅葉の時期は観光客が多く訪れるのと、今年は四国88カ所霊場巡りが逆打ちのため多くのお遍路さんでにぎわっている。



図—13

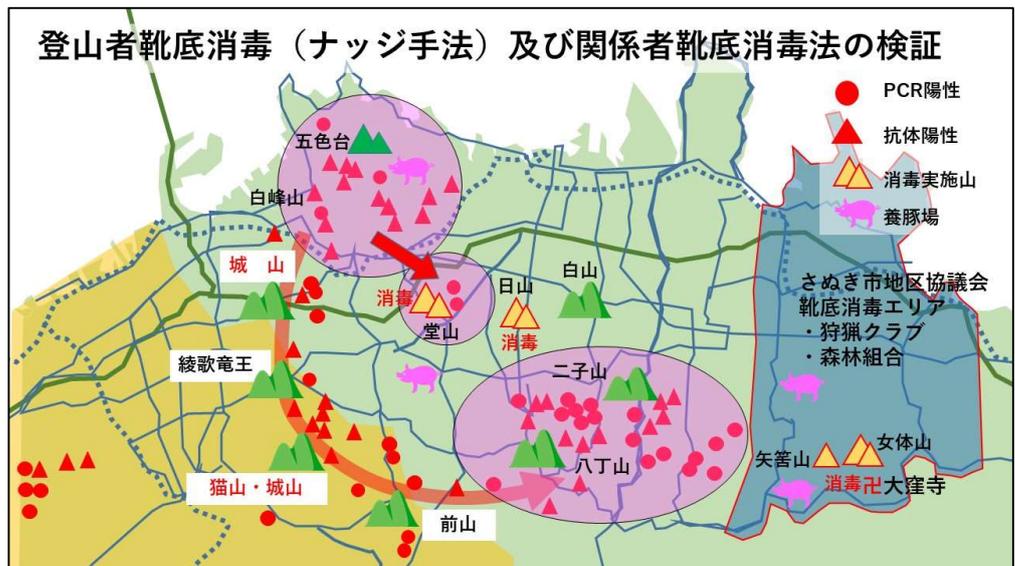
写真—6

6) 啓発活動など

啓発活動として、高松市内の登山用品店2店舗の登山靴売り場に啓発ポスターの掲示を依頼した。

7) 登山者靴底消毒（ナッジ手法）及び関係者靴底消毒法の検証

ナッジ手法の検証では、陽性イノシシの初発は五色台で、その後、堂山、城山(きやま)と続発した。城山(きやま)からは登山者が多い、猫山・城山(しろやま)を經由し、管内の登山としてはあまり人気のない八丁山、二子山のある香川町、香南町、三木町周辺で陽性イノシシが確認された。ナッジ手法による靴底消毒を堂山、日山で実施した地域では陽性イノシシは確認されていない。また、さぬき市協議会では、狩猟クラブ、森林組合等に靴底消毒エリアを設置し、大窪寺においても消毒マットを設置し、現在（R5年1月）のところ陽性イノシシは確認されていない。（図—14）



図—14

6. まとめ

今回、東部地域家畜防疫推進協議会で特定家畜における発生予防対策事業を実施した。HPA I に関しては気象条件や気温の温暖差が発生リスクに關与することが示唆され、県内のHPA I 発生パターンを推測し地域説明会で活用した。ため池の野鳥飛来対策を実施することにより、養鶏場や地域住民へのHPA I 発生に対する安心感が確保され、CSF ウイルス拡散防止対策により、協議会を通じて地域的な対策を推進することが出来た。今後、更に市町、地区団体等と協議会が連携し、特定家畜伝染病の発生リスク低減対策を推進していく。(図—15)

まとめ

東部地域家畜防疫推進協議会の取組み

- ・ 気候条件や気温の寒暖差が発生リスクに關与示唆
県内HPAI発生パターンを推測し地域説明会で活用
- ・ 野鳥飛来防止対策により農場・地域住民の安心確保
- ・ CSF ウイルス拡散防止対策により地域的な対策推進
- ・ 市町、地区団体等協議会と発生リスク低減対策を推進

図—15